

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：26401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12968

研究課題名（和文）省察的実践の理論に基づくソーシャルワーク実践方法と省察ツールの開発

研究課題名（英文）Development of social work practice methods and reflective practice-assisted tool based on the theory of reflective practice

研究代表者

加藤 由衣 (KATO, Yui)

高知県立大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：30611991

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、省察的実践の理論に基づくソーシャルワーク実践方法論の構築を目指して研究を進めた。そのために、まず省察的実践の価値・知識・方策・方法の側面から、省察的実践の特徴を検討しまとめた。次にその特徴をふまえて、省察的実践に関する文献を用いた分析を行い、省察的実践を特徴づける29のカテゴリーから省察的実践の構成指標を生成した。そして、構成指標をもとにコンピュータシステムを活用した省察ツールの開発を進め、eスキャナー（省察的実践モデル）を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

省察的実践については、構成要素が不明確なことや実践への具現化の困難さなどが、これまで課題として言及されてきた。このように曖昧さが指摘されてきた省察的実践について、理論的特性を明確化したことに、本研究成果の学術的意義がある。また、eスキャナー（省察的実践モデル）の開発によって、ソーシャルワーカーが省察的実践家としての現状や課題を可視化しながら認識・発見することを支援し、省察的実践家としての成長を促進できる点で社会的意義があると考えている。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted with the aim of constructing a social work practice methodology based on the theory of reflective practice. To this end, I first examined and summarized the characteristics of reflective practice from the aspects of values, knowledge, institutional knowledge, and methods of reflective practice. Next, based on the characteristics, I conducted an analysis of the literature on reflective practice and generated a construct indicators of reflective practice from the 29 categories that characterize reflective practice. Then, based on the construct indicators, I developed reflective practice-assisted tool using a computer system and presented an e-scanner (a model of reflective practice).

研究分野：社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク 省察的実践 省察 eスキャナー クリティカル

## 1. 研究開始当初の背景

省察的实践は、Schön (1983) が、普遍性・論理性・客観性を特徴とする近代科学の専門職モデルへの批判から、新たな専門職モデルとして提示したもので、教師や看護師、ソーシャルワーカーなどの対人支援専門職のなかで注目されてきた。省察的实践について、Schön (1983) は、「実践者が不確実性と不安定さ、固有性のある状況や、価値観の葛藤が生じている状況に適切に対応する際の『わざ (artistry)』の中心は、行為の中の省察というプロセス全体にある」(Schön1983:50)として省察の重要性を説いた。そこでは特に、「行為の中の省察」に着目し、実践を行いながら「状況と対話」する実践的思考スタイルに専門性を見出したのである。また佐藤 (Schön = 2001:10) によると、省察的实践は、実践を対象化して検討する「行為についての省察」も含み、そこでは「自己との対話」が展開される。

こうしてみると、複雑な状況にある固有な利用者を支援するソーシャルワークでは、標準化された対応が存在しないため、省察をとおした実践が求められるといえるだろう。そして近年、わが国のソーシャルワークにおいても、その重要性が指摘されているところである (空閑 2012)。

しかし一方で、実践にともなう問題も指摘されてきた。それは、実践行為が省察や思考の結果であるかどうか明らかでなく、省察できたと他者が測定できないという問題 (Iker2016) や、省察の定義や構造の曖昧さゆえに、省察を促進・抑制する要因や変数が不明確であるという問題 (Wilson2013) である。そして、省察的实践を構成する要素や、省察的实践がどのように現実化されるかが不明確なことも、問題としてあげられている (Ruch2002)。

加えて、省察的实践を促進するツールの課題も指摘できる。具体的に、省察的实践に不可欠な「自己との対話」では、自分自身や実践を客体化して捉える必要があるため、省察を促進するツールとして、しばしば実践記録が取りあげられ、記録作成が省察に有効であると指摘されてきた (Bolton2014; 保正 2015)。しかし「自己との対話」では、実践状況に限らず、基盤となる考え方や自身の特性などにも向き合うことで、省察的实践家としての力や自らの実践スタイルを認識し、深めることができる。その意味で、実践記録だけでは省察の範囲が限定されると考えられる。さらに近年の省察的实践は、活用する理論や組織などのシステムそのものを問う批判的省察 (critical reflection) を含んでいる (Fook2016)。このことから、省察的实践には、実践状況に加えて、ソーシャルワーカー自身やシステムへのまなざしが不可欠といえるだろう。つまり、これらを包含しながら省察を支援するツールが必要と考えられるのである。

## 2. 研究の目的

本研究では、省察的实践の理論的特性をふまえて、省察的实践の構成要素とそれらの関係を明らかにし、それらの要素を組み込んだ省察を支援するツール (以下、省察ツール) の開発を行うことを目的とする。それにより、実践で活用可能な省察的实践の方法論の構築を目指していきたい。

## 3. 研究の方法

研究方法について、研究開始当初は先行研究からの理論研究とインタビュー調査による質的研究を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、保健・医療・福祉機関・施設職員へのインタビュー調査は適当でないと判断し、理論研究を中心とした研究方法に切り替え、以下の方法で研究を進めた。

- 1) 省察的实践家の理論的特性の整理と確立
- 2) 理論的特性をもとにした省察的实践の構成指標の明確化
- 3) 省察的实践の構成指標をふまえた省察ツールの開発と検証

## 4. 研究成果

- 1) 省察的实践家の理論的特性の整理と確立

まず、ソーシャルワーク実践の4大構成要素である価値・知識・方策・方法という側面から、先行研究をもとに省察的实践理論の特徴を整理した。その内容を説明すると、価値要素では、いまこの瞬間の行為や性質など、自分自身の全体像を受け止め、認識する、自らの感情を理解する、実践や省察、専門職としての発展に対する信頼と責任、開かれた姿勢をもつ、という特徴が指摘できる。次に知識要素については、形式知と実践知の双方を重視する、形式知と実践知の相互作用により実践での効力を高めていく、実践や経験に含まれている実践知から知識の創造を行うことが特徴となる。そして方策要素は、制度・政策やサービス、実践機関など、メゾ・マクロシステムへの批判的視点と変革の姿勢をもつ、他職種や利用者など他者の認識や考えに耳を傾け、受けとめる、ソーシャルワーカー自身や自らの基盤、利用者への影響を問い直す、という点に省察的实践の特徴が見いだせる。最後に方法要素については、省察的实践が理論的な実践と実践の理論化の双方向のアプローチを可能にすること、過去から学び、現在・未来へと活かす、過去・現在・未来を包括したプロセスをもつことが特徴的といえる。

加えて、これら4側面の関係について、価値要素は省察的实践に含まれる感情や態度といった情緒的領域を示し、知識要素はソーシャルワーカーに内在する形式知や実践知と、実践知を知識

の創造によって外的世界へ導こうとする知的領域の活動を示していた。すなわち、価値・知識要素は省察的实践家としてのソーシャルワーカーの内的世界の姿勢や活動に特徴があると理解できる。それに対して、方策・方法要素は省察的实践の時間的・空間的側面を特徴としている。つまり、方策要素は、ソーシャルワーカーと環境の相互作用への意識や、内的・外的環境に対する姿勢や取り組みといった、体系的な理解と行動を示す。そして方法要素では、理論と実践を統合しながら、過去・現在・未来という時間的流れのなかで省察的实践家としての発展を目指すプロセスといえる。

## 2) 理論的特性をもとにした省察的实践の構成指標の明確化

次に、これらの理論的特性をふまえて、省察的实践の構成指標の検討・整理を行った。具体的に、上記の価値・知識・方策・方法要素の特徴を意識しながら、省察的实践に関する文献から各要素にかかわる記述を項目として抽出・コード化し、それらのコードについて質的帰納的分析によりカテゴリー化を行った。そして、その結果を省察的实践の価値・知識・方策・方法要素の下位項目として配置し、省察的实践を構成する指標として下図のように整理した。

全体	省 察 的 実 践							
領域	価 値		知 識		方 策		方 法	
属性	自 己	姿 勢	基 盤	関 連	他 者	クリティカル	行 為	変 容
内容	自己認識	開放性	理論知	知の包括性	協働的対話	利用者	経験への意識	実践の変容
	自己受容	想像性	実践知	知の創造	他者の理解	システム	行為の前の省察	理論と実践の関連
	感情への意識	創造性	直観	知識と実践	相違の理解	権力への対応	自己との対話	未来の実践
		役割意識	経験			自己へのまなざし	行為の理解	専門的自己的発達

若干説明すると、省察的实践は、価値・知識・方策・方法に関する領域から成り立ち、さらにそれらの領域を構成する属性として、分析結果から自己・姿勢・基盤・関連・他者・クリティカル・行為・変容に整理できた。そして、その下位項目には、29の省察的实践の内容を指標として位置づけた。このように、省察的实践を特徴づける内容を指標として提示することで、曖昧さが指摘されてきた省察的实践について、一定の枠組みを示した。

## 3) 省察的实践の構成指標をふまえた省察ツールの開発と検証

これまでの省察的实践の理論的特性や構成指標をふまえて、最後に省察ツールの開発と検証を進めた。特に本研究では、研究代表者が所属するエコシステム研究会でこれまで開発してきたeスキャナーの活用可能性に着目し、省察ツールを開発していくこととした。なぜならeスキャナーは、生活という捉えどころのない実体について、コンピュータを活用して利用者の生活エコシステム情報を把握し、その結果を視覚化することで、利用者と支援者が生活に対する認識を共有できるようにする機能をもつからである。この機能は、省察的实践という暗黙的要素を含んだ実践に対して、ソーシャルワーカーが意識化することを支援できると考えた。つまり、eスキャナーは入力した情報について、シミュレーションを通じてグラフなどで視覚化するため、ソーシャルワーカーが省察的实践家としての自身の状況を視覚的に認識し、そこから自身の成長課題を発見する助けになると考えたのである。

そこで、eスキャナーにこれまでの研究で整理してきた省察的实践の構成指標を導入することで、ソーシャルワーカーの省察的实践の状況を視覚的に表示する省察ツールの開発を進めることとした。なおeスキャナーでは、領域や方法に応じた独自のフォームを設定し、そこに構成指標の内容と質問項目を組み込んだものを「モデル」と呼ぶため、本研究ではeスキャナー(省察的实践モデル)と称していく。

eスキャナー(省察的实践モデル)を開発するために、まず上図に示した省察的实践の構成指標について、具体的な質問項目を検討した。eスキャナーの理論基盤であるエコシステム構想では、各構成指標をソーシャルワーク実践の価値・知識・方策・方法の4大構成要素と組み合わせる因子を生成し、因子に関する質問項目を作成している(太田ら2005)。そこで、この考え方に基づきeスキャナー(省察的实践モデル)の因子(質問項目)を作成していった。具体的に、価値に関する因子は態度や姿勢、志向、機運、関心、自覚などの価値意識を問う質問項目となり、知識に関する因子は理解や事実、実状、内容、関係、理解といった状況認識を確認する質問項目が当てはまる。そして方策に関する因子は、制度・政策や計画、施策、見通し、試案といった資源施策を把握する質問項目が該当し、方法に関する因子は取組や対応、参加、活用、協力、努力

などの対処方法を捉える質問項目が必要となる。このようにして、先に示した省察的実践の 29 の内容項目に関して、それぞれ4つの因子を生成し、因子に関する質問項目を作成した。

そして、構成指標及び質問項目を e スキャナーに導入し、e スキャナー（省察的実践モデル）を作りあげた。その一部が下図のとおりである。下図の上部にある画面が、e スキャナー（省察的実践モデル）のアセスメント画面であり、この画面を見ながらソーシャルワーカーは省察的実践の全体像を意識することができる。また、各構成内容について左下のような質問画面からソーシャルワーカーは現在の自身の状況を回答していく。そして、その結果がコンピュータのシミュレーション機能により、右下のようなグラフとして表示できる仕組みになっている（その他棒グラフや折れ線グラフでの表示も可能）。



こうした機能をもつ e スキャナー（省察的実践モデル）は、質問項目への回答をとおして省察的実践家としての自己を振り返ったり、客観視したりすることができる。このことは、ソーシャルワーカーが「自己との対話」を展開していることに他ならず、このプロセス自体が省察的実践の展開にもつながると考えられる。またそのなかでは、実践に含まれる知に気づき、その言語化を試みるよう促す役割も担うことができるだろう。省察的実践では、実践のなかの暗黙的な要素を言語化し、他者と共有できるようにしていくことが求められる。そのため e スキャナー（省察的実践モデル）がその気づきや可視化プロセスを促す機能をもつ点に、このツールの意義が見いだせる。

そして、質問項目への回答結果の視覚化（グラフ化）は、省察的実践家としての自己の現状認識を可能にし、課題や改善点の発見を支援することができる。それは、ソーシャルワーカーの省察的実践家としての成長を促す契機となりうる。省察的実践家は、省察のなかで専門職として発達していくことが求められるゆえ、e スキャナー（省察的実践モデル）がソーシャルワーカーの成長を促進する機能を有する意義は大きいだろう。

このように、e スキャナー（省察的実践モデル）は、省察的実践の現状認識と省察的実践家としての成長課題への気づきを促すことで、省察的実践という理論を実践に結びつける役割を担うと考える。さらに e スキャナーでは、入力した情報をクラウド上に保存し、過去の入力情報とのグラフの比較ができるようになっている。この機能を用いることで、省察的実践家としての変化・変容の認識も可能であり、成長の実感や新たな課題の発見を支えるツールとしても活用できると考えている。

本研究は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて、当初の計画通り研究が進まなかったが、研究方法の切り替えにより理論研究を中心に展開し、実践現場で活用可能な省察的実践の

方法論を模索してきた。今後も継続した研究により、成長段階に応じた省察的実践の特徴や省察的実践を促進する教育方法など、省察的実践について探究していきたい。

注：

- 1) e スキャナーは、太田義弘（大阪府立大学名誉教授）が主宰するエコシステム研究会が、株式会社伸和トータルエンジニアリングの協力を得て開発したコンピュータ支援ツールである。

<参考文献>

- ・ Bolton, G. (2014) *Reflective Practice: Writing and Professional Development*, SAGE .
- ・ Fook, J. (2016) *Social Work: A Critical Approach to Practice*, SAGE.
- ・ 保正友子 (2015) 「ソーシャルワーク実践における相談面接記録の方法」『ソーシャルワーク研究』41 ( 1 ), 18-24 .
- ・ 空閑浩人 (2012) 「序章 ソーシャルワーカーとその実践を支える『知』の形成」空閑浩人編著『ソーシャルワーカー論 - 「かわり続ける専門職」のアイデンティティ - 』ミネルヴァ書房, 1-16 .
- ・ 太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著 (2005) 『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング』中央法規 .
- ・ Schön, D. A. (1983) *The Reflective Practitioner*, Ashgate .
- ・ Wilson, G. (2013) "Evidencing Reflective Practice in Social Work Education: Theoretical Uncertainties and Practical Challenge", *British Journal of Social Work*, 43, 184-172.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 加藤由衣	4. 巻 1
2. 論文標題 省察的実践支援ツールの開発に向けた検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク支援研究	6. 最初と最後の頁 113-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西梅幸治・加藤由衣	4. 巻 72
2. 論文標題 地域共生社会の実現に向けたジェネラル・ソーシャルワークの意義と展開課題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 高知県立大学紀要 社会福祉学部編	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 加藤由衣	4. 巻 71
2. 論文標題 新たな社会福祉士養成カリキュラムに関する一考察 国際的動向をふまえたクリティカルな視点からの課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高知県立大学紀要 社会福祉学部編	6. 最初と最後の頁 79-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 加藤由衣・西梅幸治・山口真里	4. 巻 9
2. 論文標題 ソーシャルワーク実習教育における学生のコンピテンス涵養の意義と課題 実習を経験した学生へのグループインタビューの分析から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国・四国社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤由衣	4. 巻 70
2. 論文標題 ソーシャルワークにおける省察的実践支援ツールの構成指標の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高知県立大学紀要 社会福祉学部編	6. 最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西梅幸治・加藤由衣	4. 巻 69
2. 論文標題 スクールソーシャルワークにおけるストレングス・アセスメント指標の構造	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知県立大学紀要 社会福祉学部編	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤由衣	4. 巻 68
2. 論文標題 省察的実践の実践モデル構築に関する一考察 ソーシャルワーク実践の構成要素からの検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高知県立大学紀要 社会福祉学部編	6. 最初と最後の頁 56-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山口真里・西梅幸治・加藤由衣
2. 発表標題 ソーシャルワーク教育における実習スーパービジョンの方法と課題 - スーパービジョン過程での省察に焦点を当てて -
3. 学会等名 日本社会福祉学会中国・四国ブロック第51回高知大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------